

『赤毛のアン』の『緑色の切妻屋根の家』。



てあげられる。

プリンス・エドワード・アイランドは、セント・ローレンス湾の海流のために寒さが緩和されている上に、白い砂浜や、起伏した緑の農地、そしてロブスター料理……と、観光資源に富み、カナダの他の地域やアメリカ合衆国から、フェリーや飛行機で年間六十万人をこえる観光客が訪れる。観光業は年商一億ドルの一大産業だ。プリンス・エドワード・アイランド国立公園は、国内で一番小さな国立公園だが、人気は二番目に高い。

P E I の『輸出品』の中で最も有名なものは、ルーシー・モンゴメリーの『赤毛のアン』(原題は、『緑色の切妻屋根の家』)をはじめとする一連の作品だ。作品はいまでも世界中で読まれており、その中に出てくるなつかしい土地を訪ねて、毎年何千という『アン・ファン』がやってくる。もちろん、キャベンディッシュにある『緑色の切妻屋根の家』は欠かせない観光名所だ。

一九六五年以来、シャーロットタウンでは『赤毛のアン』のミュージカルが毎年開催されているが、これも原作に劣らず大人気を博している。場所は、シャーロットタウン建国会議の百周年を記念するために、各州が拠出した寄付金で建設された芸術センターである。

ニュー・ブランズウィック州

英語とフランス語

が公用語

ニュー・ブランズウィック州は、ケベック州に次いでフランス系住民の割合が高く(三五パーセント)、ケベック州と並んで英語とフランス語が共通語となっている(英仏両語が公用語として定められているのは、連邦政府とニュー・ブランズウィック州だけ)。

その理由は、ニュー・ブランズウィックが、かつてアカディアと呼ばれていたフランス植民地の一部だったからである。アカディア(アカディ)とは、『豊饒な土地』という意味である。この植民地は一六〇四年に設立されたが、一七一三年に英国に割譲され、フランス系住民(アカディアン)の多くは追放されて米ルイジアナ州に移った(ルイジアナ州では、アカディアからやってきた人々を『ケイジャン』と呼ぶ。『アカディアン』が変形した言葉である)。アカディアンの一部は奥地に逃げ込んでひっそりと住んだ。事態が落ち着いたらと、ルイジアナから戻ってきた人々も多かった。しかし同じフランス系といっても、アカディア人はケベック人とはいろいろな点で異なる。フランスの出身地も違えば、渡来の時期も、なまりも、伝統的な職業も違う(ケベックの人々は豊かなセント

首相 リチャード・ハットフィールド(進歩保守党)
首都 フレデリクトン
面積 七三、四三六平方キロ
人口 七二二、三〇〇人(八四年)
州民所得 七十二億ドル(八四年推定)

・ローレンス川岸を耕す農民であったが、アカディア人は漁夫が多かった。同じくカトリック教徒ながら、主な祭日も、ケベックでは聖霊者ヨハネの祭日(六月二十四日)、アカディアでは聖母マリアの被昇天祭(八月十五日)だ。
その後、米国の独立戦争の結果、親英国派の人々およそ五千人が当時ノバ・スコシアといわれていた一帯に渡ってきた。二つの植民地に分割され、一七八四年、今日のニュー・ブランズウィック州の前身であるニュー・ブランズウィック植民地が誕生する。
こうして、フランス系のアカディア人と、米国から渡ってきた英国系住民が共存する、現在の二言語社会へと発展したのである。
ニュー・ブランズウィック州の人口はおよそ七十一万二千人。その四五パーセントは、セント・ジョン(四万五千人)など、八つの都市に住んでいる。
州の経済基盤は、林業、鉱業、漁業、ポテト栽培を中心とする農業、それに観光だ。
ニュー・ブランズウィック州は、世界でも有数の森林地帯で、面積のほぼ八五パーセントはトウヒ、バルサムモミ、マツ

日本向けに魚介類

カニ、ニシン、タラ、カレイ、シシヤモ、マグロ、エビ……世界三大漁場のひとつグランド・バンクスを控えた大西洋沿岸は、魚介類の宝庫である。

日本にも、ズワイガニ、ニシン(およびカズノコ)、シシヤモなどを大量に輸出しているが、特にニューファンドランド沖を中心に漁獲されるシシヤモの対日供給はカナダがノルウエーを抜いて第一位、ズワイガニはアラスカに次いで第二位だ。

そのほか、量は比較的小さいが、日本は甘エビ、ヒラメ、オヒョウ、それにカラスガレイなどの底魚も入荷しているし、一頭三百キロから四百キロもある本マグロも空輸されている。日本のレストランでお目にかかるアメリカン・スタイルのロブスターも、ほとんどがカナダ大西洋産である。

今後期待されているのは、ウニやツブガイ、それにマダラである。マダラは、日本人の口にもよく合う。

すでに外食チェーンがわずかながら利用しており、これから次第に入荷が増えるものと思われる。また大西洋沿岸は、セント・ローレンス川河口一帯を中心に、世界最後のウニの宝庫といわれており、そのウニが日本でシタネに使われる日も、そう遠くないだろう。